



鹿沼の自然・栃木の旅

月報第32号

(2015年3月)



『動物談叢』

詳細は5頁から

北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼



自然観察クラブ・春の特別企画
陣馬（場）山～景信山ハイキング
～甲州街道、小仏関所跡を訪ねて～

東京ではすでにサクラが満開。鹿沼でも開花情報が飛び交い始めました。

このところ毎春のように東京の高尾山を訪れていますが、今回は中央線で小仏トンネルを抜け、神奈川県側から陣馬山に登ってみましょう。藤野駅で下車、バスの便もありますが、そのまま車道を歩いて落合へ。ここから尾根に取りついて陣馬山（標高 857m）をめざします。陣馬山山頂は広々とした気持ちのいい草原（または泥地）で展望が良く、晴れて空気が澄んでいれば日光連山も遠望できます。ここから県境を景信山まで歩いてお昼。山頂には茶店があって食事もできます。

景信山を高尾山方面に下った所が小仏峠です。武蔵国の小仏と相模国の与瀬を結ぶ旧甲州街道の要衝で、小仏の関所は当初この地に設けられましたが、後に駒木野に移設されました。県境を離れて降り立った所が小仏の集落です。まず宝珠禅寺に参詣し、天然記念物のカゴノキの大木を見学しましょう。ここから小仏川に沿って、旧甲州街道を高尾駅まで、途中、常林寺、猪鼻山（圏央道ジャンクション建設で既になくなっているかも）、いのはな供養塔、天満宮（高尾梅林）、小仏関所跡、小名路（昔はいくつかの石標や石碑があったという）など訪ねながら歩きたいと思います。

日 時：4月5日（日）AM5:00JR 鹿沼駅集合

行 程：鹿沼 5:32——5:47 宇都宮 5:59——7:52 新宿 8:03——

（八王子 8:56、高尾 9:05）——9:18 藤野……上沢井……

（一ノ尾の尾根）……陣馬山……明王峠……堂所山……景信山……

小仏峠……小仏……宝珠禅寺（カゴノキの大木）……大下……日影

……常林寺……蛇滝入口……猪の鼻山（いのはな供養塔）……

高尾梅郷（天満宮）……小仏関所跡……小名寺……高尾——八王子

——新宿——宇都宮——鹿沼

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、

ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

参考書（植物図鑑、高尾・陣馬わくわくハイク（のんびる舎）、

東京都の歴史散歩⑤多摩・島嶼）、

1/25,000 地形図は「八王子」「与瀬」

参加費：運賃おとな 3,830 円、子ども約半額（休日おでかけパス使用の場合）

保険料（新年度分）1,300 円（北光クラブの行事として認められました）



☪ 山行案内・2 ☪

日光・鳴虫山ハイキング ～日光山の歴史遺産にふれながら～

春は 1 年のうちで最も花の彩りの美しい季節。サクラの花見だけで済ますのはもったいない。雪が解けて春を迎えた日光の鳴虫山（標高 1103m）に登ってみましょう。そろそろカタクリやアカヤシオが咲き始める頃でしょう。日光のような山地では、ヤマザクラの花が終わってから、ヤマザクラによく似たカスミザクラ（ケヤマザクラ）が咲き始めます。エイザンスミレやアオイスミレ、タチツボスミレ、そして可愛らしいアズマイチゲやキクザキイチゲも。そんな近い種類の明らかな違いを調べることも楽しいものです。

旧日光市役所⑨に車を置いて観音寺に参詣し、鳴虫山に向かいます。山頂からは目の前に雄大な女峰山を望むことができます。ヒオドシチョウやタテハ等のチョウが飛び交っているかもしれません。山を降り立った所にある含満が淵は田母沢御用邸や日光植物園でへだてられ、国道から見ることはできませんが、大谷川では最も美しい景観をもつ溪流です。水辺を好むチョウジザクラが咲いているかもしれません。

山に向かう道々、また下山後に立ち寄る社寺、歴史遺産について、日光山輪王寺宝物殿学芸員、佐々木茂氏が案内して下さる予定です。できれば輪王寺三仏堂にも参詣し、宝物殿も見学したいと思います。

ぜひご参加下さい。

日 時：4月19日（日）AM6:00 北小西門集合

行 程：鹿沼北小——旧日光市役所®……観音寺（天台宗）……鳴虫山登山口（15分）……天王山（50分）……神ノ主山（70分）……鳴虫山（20分）……合峰（40分）……独標（30分）……含満ガ淵（30分）……浄光寺（天台宗）……日光山輪王寺宝物殿……三仏堂……旧日光市役所®——鹿沼北小

服 装：防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、懐中電灯、ストック、参考書（栃木の山 150、栃木百名山ガイドブック、栃木県の歴史散歩、とちぎの社寺散歩、とちぎの天台の寺めぐり）、1/25,000 地形図は「日光南部」

参加費：ガソリン代等として おとな 500 円、子ども 250 円、輪王寺宝物殿入館料 おとな 300 円、子ども 100 円
保険料 1,300 円（4 月より来年 3 月まで）。

問合せは共に：電話 090-1884-3774（阿部）



❀ 自然観察クラブ・5月の予定 ❀

- ☆ 5月3、4日 秩父・三峰山～雲取山
- ☆ 5月10日 日光・滝尾古道ハイキング（鹿沼学舎と共催）
- ☆ 5月17日 茂木・焼森山と鶏足山ハイキング

黒川義太郎著『動物談叢』

(昭和9年3月17日・改造社発行)

干支に因める雑話

猪

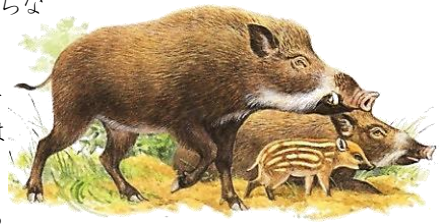
猪と云うと世間の人は一概に恐ろしい野獣の様に思っているが猪は左程恐ろしい動物ではなく寧ろ人間には親み深い可憐な動物である。勿論山野で生育した猪は動作が乱暴だが夫でも昔話によくある様に好んで人に危害を及ぼすことはない。彼等はただ猪狩の時、鉄砲や獵犬等に脅され狼狽て自分の巢へ逃げ帰ろうとあの気球形をした身体を宙に浮かせて真直に木立でも溪谷でもおかまいなく恐ろしい勢いで駆け出すが、これは一身が危くなつたと云う様な特別の場合だけのことである。

当園では現在土佐産の猪を2頭、大正4年以来飼育して居るが、よく人間に馴れて居て餌を呉れる人だと見ると、いかにも嬉しそうに短い尻尾をピコピコ動かせ、柵に前足を寄せ鼻をグウグウなしてお愛想をすると云った却々の愛嬌者だ。2頭とも牝なので、猪にはつきものの牙がない所から「やあ！ こんな処に豚が居るよ」と子供などに笑われる位素人眼には牝猪と豚の区別を付け兼ねる。難かしい理屈は抜きにしても豚が猪の進化したものだと云うことはこれで明かに頷かれる筈だ。

野猪とは山野に棲息して居る猪で、家猪とは人間に飼育された2代以後のを云う。野猪は好んで森林地帯に棲息して、鼠、昆虫類を初め木の新芽、果実と云ったものを常食して居るが、冬期など食物が欠乏して来ると遠慮なく群をなして人家近くまで遠征して来て農家にも思いやらない被害を及ぼすことがある。外国には沢に居る蟹に上方から鼻の先で石を落して捕えて食う様な気の利いた野猪も居ると聞いて居る。

野猪の巢は深い木立を選んであの強い鼻で地面に深さ3尺位の穴を掘って牙で萱や薄の葉をとって来て底に敷いて温かい褥を造り、その上に雨雪を防ぐために粗朶や薄を混ぜて屋根を設けるなど却々ぼんくらな人間には一寸真似の出来ないような業をするのである。そして必ず玄関と勝手と云った工合に出入口を区別して居るのも他の動物には見られない面白い癖であろう。

野猪は冬だけでなく、夏でも蚊や蚋を避ける



ためにその安全な巣の中に住んで居て、食物が無くなると近辺を漁って歩かし、満腹になると巣に帰って来ると云った暢気な生活振をして居る。

段々と成長して来ると仔猪は繁殖を図るために親猪と別れ、牝を見出して新しい巣を造って浮薄な現代人の手本にしたい程の睦ましい一夫一婦の生活が営まれる。野猪は人に馴れないので一寸飼育も困難だが、2代目になるとすっかり人間に懐いて来る。肉は美味だし繁殖力も相当に強い。私は亥年の初めに当って世間で、山林等を利用して林生動物である所の猪の人工繁殖を図って食糧問題の一助にでも資する努力家の出て来ることを望むものである。（大正12年1月3日・新愛知）

誌上動物園

動物性癖漫談

熊

仔熊の笹啼 仔熊には笹啼きと云う面白い習慣があります。生れてから間の無い仔熊を牛乳などで飼養して居ると、その熊の仔が地上に坐って、前肢の掌に唇を当てて、かなり遠鳴りのする声で、掌を吸うようにして発声を致します。その時、仔熊の口角には口内粘液(つば)の泡沫が盛んに吹き出されて、唇を伝わって流れ出し、まるで蟹の泡を吹くようになります。この啼き声を笹啼と称えて居ります。



笹啼して居る仔熊は、何とも云えない気持のよさそうに恍惚としてこれを継続して居ります。このように仔熊が掌の一部を口に含んで、何か吸うようにして居るのは、仔熊が母親に伴われて、授乳される場合であつたなら、母乳をたらふく飲んでから、母親の乳頭を啣えて、笹啼をしながらい眠りに付くのです。ですから自分の掌を母の乳房に擬えて、笹啼をするのは、単純に見れば奇異の感じがするのみですが、實際仔熊の心を思いやれば、憐れむべき孤児の境遇を偲ばしめるものではありませんか。この笹啼は私達人間の子守唄のようなものですから。

狐

食物を隠す癖がある 狐は魔の動物のように、種々の伝説や臆説がありますが、少しも実説として捕捉されては居りません。それは諸置き動物園内で見た所の一癖を挙げますと、食物を与えられた時、幾片かの肉を箱や室の隅、或は寝葉の中などへ1片れずつ啣えては隠しに行き、1片れ隠し終ると第2片れ、第3片れと順々に隠してしまふ。今度は1片れずつ取り出しては食べるのであります。

狸

狸の木登り 狸も狐と同じように、昔から種々な訛伝や

臆説に富んで居る動物ですが、これも亦動物園

で気付いた習癖の一つ二つを申述べて見ましょう。狸

は足掛りのある所へよく登る癖があります、樹木にも登

れば、金網の張ってあるような所にもどンドン登る。登る

のは上手ですが、登り詰めた儘後退りに降りることを知りま

せん。さりとて逆戻りするような智慧もないようです。結局登り詰めた処に疲れるまで止

って居て、いくら高い処でも登り詰めた丈の高い所から、余儀なく墜落するのでありま

す。

喜劇一幕 或る動物園で一室に3頭飼ってあった狸が、戸締りに何の異常も無い

のに、僅か1時間半か2時間ばかりの間に、3頭とも見えなくなって仕舞ったことがあり

ました。それは宿直して居た畜養人が、朝早くその狸の室内を掃除して、次ぎの当直

者に引き継ぐ時に見付け出した出来事でした。

掃除の時に受持の畜養人は、狸が室の周囲の金網へ登り詰めた儘で、まだ墜落

しなかったことを認めて居りましたが、何処からも逃げ出した形跡が無いので、3頭共

姿が見えないとは思議なことである、多分掃除に出入の際出入口の戸を締める

のを忘れて次の室を掃除し終り、次の室から出るとき、狸室の出入口の不取締りに

気付いて、狸の室内を覗いて見ると、3頭共見えないから、申訳がなくてそとその戸

締りを直して、空とぼけて引継を済ます積ではなかったかと、とんだ濡衣が畜養人に

かかりましたが、最後の時間の経過が少いから、誤って逃がしたのでなければ、天

井網が怪しいと云う事になって当直の畜養人が天井に登り金網を改めると、何時も

掃除人が室に入ると狸が登り詰める一隅の天井の金網が、古びて破れて居るのが

発見されました、しかも金網の破れの周囲には狸の毛が付着て居るではありません

か。

狸はこの穴から逃げ出したものでした。そこで天井の上から室続きの屋根の上を見

廻すと、狸室から3間程距った処に一段高い屋根があつて、その麓の出張った下

に狸先生3頭共頭を揃えて眠って居たのが発見されました。これが真の狸寝入と云

うのであったかも知れません。

それから手配して3頭の中、屋根の上で捕えられたのもあり、或は躍下ったのを地

上に待ち伏せして収容し終せたような、馬鹿氣た事実遭遇したこともありました。

狸の溜め糞 狸の溜め糞も亦有名なものです。野に在っても室内に在っても同じこ



とで1頭でも2頭でも、又幾頭でも必ず1個所に、幾日間でも続けて大便を仕溜めるのですから、放って置いて掃除しない場所、野原にあっては糞の山が築かれます。

鳥獣性癖漫談

人間は倒さに歩くと云って笑って居る動物 蝙蝠が、こう云って笑って居るか、どうかは保証の限りではありませんが、蝙蝠が休息して居ります時には、少しでも爪の掛かる所があると、そこに爪を掛けて身体を倒まに吊り下がります。大抵の人が「蝙蝠は倒に吊り下って居て、苦しくないだろうか」とか「よく逆上ないものだ」とか云う批評やら、冗談やら申しますが、それは彼等の習性でありますから、別に苦しい事も逆上上る事も無い筈です。或る日上野動物園の参観客が蝙蝠の吊下って居る籠の前で、『蝙蝠と云う奴は年中倒さに、ぶら下って平気で居ようだが、あれで苦しくないのかなあ』と談して居るのを、恰度来合せて居た岩川理学士が聞いて居て、『人間の方では、そんな思い遣りをして見ても、蝙蝠の方では人間と云うものは、年中倒さになって歩いて居るが、頭の気分が悪くないのかしら、と云って笑っているかも知れないよ』と、話し聞かせて微笑、参観者も『成る程、それは至極面白い御解釈です』と云って、破顔大笑した事がありました。

地震を予知すると言伝られた鳥 昔から雉は地震の揺れて来ることを予感して、揺れる前に必ず鳴くと言伝えられて居りますが、永年私の実験した所によりますと、地震の揺れると同時にケンケンと鳴くのであって、その震動前に鳴くのではないと云うことが知れました。

又、孔雀も雉と同じく地震が揺り出しますと、ホーウォー、ホーウォーと、けたたましく鳴叫ぶ鳥であります。

鶴の舞踊 大抵の鶴は舞踊の真似をする、そしてその時季は春季より夏季の初めです。なぜそれが春夏の頃に限るかと言え、鶴は春期に発情を催して来るので、その時雌雄の2羽が舞踊するのです。雄がそれを始めると雌もそれに和して雄と同じような行動を取る。その状態は雄が翼を張って駈け出し駈け廻ると、雌も同様に翼を張って雄と同じ行動に出で雄が左に駈け出すと雌は右に駈け出し交互に行違ひ或は行逢うては引返す。その間雄はクルクルー、クルクルーと鳴くのですが、それが恰も舞踊につれて歌うのであるかも知見られるもので、鶴の中でも丹頂は羽の大部が白いだけに、特に目立って勇ましいものであります。



動物の生態観察並にその雑話

狐狸と鼯鼠

たぬき これは現に当園に飼ってあるもので、餌は矢張りいちちと同じであるが、この獣は外に居る時にはよく榎の実を食うものである。この榎は食われない榎で、油をしぼるものであるが、それを殻ごと食うが、殻はこなれないと見えて、よく糞の中にそれのあることを見受ける。たぬきは溜糞とて、1個所に沢山糞をためるもので、動物園などに飼ってあるたぬきでも矢張り溜糞するかどうかを調べたいとて先年本園に關係のあった、たぬきの研究家渡瀬博士が「たぬきの室を1週間ほど掃除せずに、ほっておいて頂きたい」と頼まれたので、当方では「それは不潔になってこまるが」と思ったが、博士に乞われるままに、掃除をしなかったら、果して一つところに糞を溜めたことがあった。



きつね これも餌はいちち、たぬきと同様で、よく外では冬から春にかけてよく鳴くが、動物園でも鳴くことがある。よく夜店などで、狐を小箱に跼蹐らせ、神の使だと称しておみ籤などを見物人に引かせる商売があるが、こうした狐は一見人の言葉を解するように見えるが、これまでに馴らすには仔飼いにしたものでないと出来ないであろう。

てん いちちに似た獣で、冬になると黄色の房々とした美しい毛色に変るものである。私が少年時代に、このてんがよく神社の天井などに出入することを見つけて、天井の隅の出入口から這い上って見ると、卵のからが沢山あるのが見えた。そしてその神社は人家から可なり離れて居たところを見ると、てんはどうした方法に依るか知れないが、兎に角鶏卵などを遠くから啗えて運んで来るらしい。田舎などでは鶏を野放しにして置くから、時によると雌鳥は木の蔭、軒の下などで産むこともあるので、それを失敬して来るのであろう。又日光辺では、てんのことを雷獣といって居るが、これは雷が鳴り出す際には一天かき曇って暗くなるから、てんが己れの活躍すべき夜が来たと思いちがいして、盛んに人目に触れるまでに、そこらを跳び廻るので、地方人が雷様とてんが、何か關係があるものとしてこうした名をつけたのであろう。

(昭和4年10月・鳥獣研究)

雑纂

動物の寿命

八、寿命の記録 今、既往の記録と親しく見聞した所に基き、各種動物寿命の大家要を挙げれば左の通りである。鯨はあらゆる動物中に於て最も長命のもので、学者の一定した説はないが各種の事実を綜合して考えて見ると、300年乃至800年位生きすることは確に疑いないのである。

しょうがくぼう かめ むかし まんねん い わがくに おい ちようめい おも
正覚坊 亀は昔から一万年生きるなどといわれて、我国に於ては長命のものと思わ
れて居るが、海亀の一種である正覚坊には150年という記録がある。

ぞう ねんぐらい たしか ちようめい きろく
象 150年位は確に長命するという記録がある。

こい ぎょるいちゆう もつと ちようめい ねん きろく
鯉 魚類中で最も長命なもので、150年という記録がある。

わし ちようるいちゆう ちようめい ねんぐらい い きろく
鷲 鳥類中の長命なもので100年位生きてるという記録がある。

たか わし どうよう ねんぐらい およ きろく
鷹 鷹と同様100年位に及ぶという記録がある。

わに ねんぐらい い たしか きろく
鰐 これも100年位生きるという確な記録がある。

う おい ちようめい ねんぐらい い きろく げん わたし どうきょうほん
鸚鵡 意外に長命するもので、80年位生きるという記録があるが、現に私も東京本
郷妻恋坂附近にある味噌屋では、3代も引続いて飼って居るということを聞いたこと
があるが、3代といえは大約100年位の年数であろう。

つる ねん ども わかし ちようめい い ひと よ し ところ せ
鶴 亀と共に昔から長命のものとして居ることは、人の能く知る所であるが、其の
記録は一寸見当らない。併し私の見聞する所に依れば、其の丁年期は8年から
10年と認めてよい。これを平均して寿命を定めると9年の5倍即ち45年となるが生
来至って無病の鳥であるから此の比例よりも尚お長く生きるかも知れないのである。

うま ねんぐらい ふ つう まれ ねんぐらいまで い
馬 30年位を普通とするも稀には40年位迄生きるものもある。

らくだ ねんぐらい い せつ しか わたし じっけん ところ よ そ は かん
駱駝 80年位生きるという説があるが、併し私の実験する所に依れば、其の齒の関
係より推して考えて見ても、かかる長寿は到底保つことは出来ないであろうと思う。

ま ねん ない し ねんぐらい ところ てきとう
先ず25年乃至30年位の所が適当であろうか。

うし へい きん ねんぐらい
牛 平均30年位。

くま ねん ない し ねんぐらい
熊 25年乃至30年位。

し し じゅうおう しょう かか ぞんがい たんめい たいやく ねん ない し ねん
獅子 獸王と称せらるるにも拘わらず存外に短命なもので、大約20年乃至24, 5年
位のものである。

とら たいやく ねん ない し ねんぐらい
虎 大約20年乃至24, 5年位。

しか ねん ない し ねんぐらい
鹿 15年乃至20年位。

おおかみ ねん ない し ねんぐらい
狼 15年乃至18年位。

いぬ へい きん ねんぐらい
犬 平均15年位。

ねこ ねん ない し ねんぐらい
猫 10年乃至12年位。

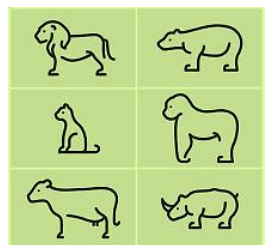
ひつじ ねん ない が い
羊 10年内外。

うさぎ ねん ない し ねんぐらい
兎 8年乃至10年位。

リス ねんぐらい
栗鼠 6, 7年位。

ねずみ ねんぐらい
鼠 5年位。

いじょう たん れい じ す こ た あ きた ほとんど さいげん と
以上は、単に例示したに過ぎないので、此の他挙げ来れば殆ど際限がないが、兎



(次ページへ続く)

かくこれ よ どうぶつ じゅうよう たいよう り かい え おも
に角之に依って、動物の寿命の大要を理解し得られるであろうと思う。

(大正2年1月・新潟新聞)

動物と火

大震火災時の動物園 動物園の火災は外国にはあるかも知れぬが、日本では先ずこの京都の猿小舎の焼けたのが一つある位なものである。尤もあの火災の時には浅草の花屋敷が焼けて、中には焼死した動物もあるような話を聞いているが実否の点はよく知らない。象などは一頭観音様の境内に救出されたようであるし、赭熊などは焼けた中において助かった風でもある。これは水槽の中につかっていたからである。

この動物園もあの火災の時には随分心配をした。最初ゆらゆらと来た時には、あれ程の大惨害を及ぼす地震などとはまるで念頭になかった。しかし続いて頻々と来るので、全然地震に就て知識をもたぬ我々は、またまた大きな奴が来るように思われ出したので、いよいよ心配になって来たのである。当時はまだ大部分猛獣小舎なども木造であった。若しももっとも大きな奴が来て猛獣小屋でも潰れたらどうするか、考えればいよいよ心配なので私は当時ここを管轄されていた博物館に相談に行った。

私の考えでは、万一の場合に備えるために兵隊さんにでも少し来ていて貰いたかったので、宮内省を通じてそれをお願い出来たらという、ふだんは何から何まで一切の世話を見ていて下すった博物館も、その時ばかりは剣もほろろの挨拶で、電話もない、人手もない、交通機関もすっかり駄目になっている、殊にこちらは水1滴かけられないような貴重品をみんなどう始末するかに就て悩んでいるのだ、そんな事どころでない、君の方の事は君の方で一切やってくれ、君にすっかりまかすから——という話である。

帰って来て、どうするか思案にくれたが、その後怖れる程の地震も来なかったし、それにまた交渉もしなかったのに、近衛の兵営から自発的に実弾を携帯した一団の兵隊さんが園内の警戒に来てくれたりしたので、何事も起らずに済んだのは幸いであった。

それから震災3日目頃だったと記憶するが、上野署の巡査がやって来て、上野の山は避難民で一杯である。そこへ今常盤花壇(※)に火が移ったので大混乱をしているから、動物園の中には空地が沢山あるのだし、中へ避難民を収容する事にしてくれ、という交渉である。



話には無理がない。それにこの非常の際であるから園を解放するのも当然のことだが、何をいうにも猛獣小舎の沢山ある動物園である。万一今まで以上の大地震が来て小舎が壊れ、猛獣があばれ出すような事でもあったら、それも亦一大事であるし、たといそれ程の事が起らぬにしても、避難民が獣猛小舎の傍に押寄せて負傷でもしたら、それも困るから、とお断りをしようとする、と、巡査は此際であるから是非に、ということで、それではと猛獣小舎の周囲に一々縄を張り、その監視は一切警察で引受ける事にし、避難民もどっと押寄せて来る間に怪我人を出す恐れがあるので、一団ずつ入れるように話をきめて巡査は一旦帰って行った。

で、早速園丁などを使って猛獣小舎の縄張りにかかった。と出来上ったので今か今かと待っているが誰も入って来ない。どうしたのかと思ひながら表門の所に行くと、先程の巡査は凝と其所に立って、火の手の様子や避難民の動静を見ている。「どうしましたか」と聞くと、常盤花壇の火の手は大部おさまるようであるし、此の分ではよいかも知れぬ、ということで、避難民収容はそれなりになってしまった。

(昭和6年5月・大日本消防)

人物紹介・黒川義太郎

くろかわ よしたろう (1866-1935) 明治～昭和時代前期の獣医師。

慶応2年8月16日、安房国北三原村(現千葉県南房総市)の生まれ。明治25年、帝国大学農科大学獣医学科卒業。帝室博物館天産部付属上野動物園に、動物園最初の選任獣医師として勤務。明治40年、初代動物園監督石川千代松のもとで導入され、大変な人気となったキリン(動物園の年間入園者が始めて100万人突破)の購入問題で石川が辞任すると、後任の園長相当職として動物園主任に就任、大正13年動物園が宮内省から東京市に移管後も、上野動物園園長として昭和7年まで41年つとめ、「動物園の黒川おじさん」として少年少女から親愛された。昭和6年同動物園50年祭には東京市長から名誉の表彰を受ける。7年病気のため休職、翌年退職し以後著作に従事した。昭和10年9月20日、療養中の東京市世田谷区の自宅にて死去(享年70)。

著作に「動物と暮して四十年」「動物談叢」など。



田沼・唐沢山より諏訪岳ハイキング

～国史跡・唐沢山城跡を訪ねて～

2月15日（日） 天気・晴れ

暦は春となったものの厳しい寒さが断続的に続く2月半ばの日曜日、県南佐野の山城とそれに続く山（いずれも栃木100名山）を縦断するハイキングに出かけました。一昨年末に訪れた葛生にほど近く、展望のきく山上からは大きく削り取られた石灰岩の白い山容が眺められました。

初めに立ち寄った村檜神社は、参道の大木の太枝が折れて撤去作業中のため中に入らず、代わりに隣の大慈寺で「相輪櫓」など珍しいものを見つけて暫し見学。墓地に囲まれた地味なお寺のようですが、実は奈良時代の開基という古刹です。

この日天気は良かったものの、吹き始めた風が次第に強く、アカマツの多い唐沢山（標高241m）の「関東ふれあいの道・松風の道」という歩道を歩きながら聞く松籟は、激し過ぎると言ってよいくらい。佐野の市街地がよく見渡せます。山頂部には、中世以来の山城の遺構を豊富に擁した唐沢山神社が展開し、高石垣など周辺をひとめぐりした後、諏訪岳に向かっていよいよ山道に入ります。吹き荒れる風に体温を奪われるようで、登ったり下ったりの山道をひたすら歩くことで寒さを紛らします。

諏訪岳（標高324m）への最後の登りを前に鞍部で昼食タイム。木々に囲まれて幾分風が和らぎます。

強風の吹き抜ける諏訪岳山頂も、下界が見渡せますが居心地はよくなく、滑りやすい急傾斜の下り道を、時に風に足を掬われそうな、ひやひやしながらの行程が続きます。麓で行き会った地元の人に、「それは大変だったべ」と言われたくらいでした。

東武佐野線でひと駅、の計画は、時間の都合で省略、教えてもらった田んぼの中の道を唐沢山麓の駐車場めざして歩きます。水の流れていない秋山川の橋の上で、隊長の地図が風に流されてしまいました。歩きながら通り抜ける集落は、方々に土蔵が見られ、この地の伝統と豊かさを感じさせます。それでも今人口は減少中、唐沢山入口の田沼高校は、2年前に閉校になっています。立派な設備がそのままに、桜の木々の芽が膨らんでいました。



本日2つ目のピーク
諏訪岳山頂にて

✿ 参加者

佐々木伸二、石崎隆史・裕子・理恵、阿部良司・みゆき（計6名）

✿ 見た植物(50音順、*は特に多く見られたもの))

（針葉樹）アカマツ、コメツガ（唐沢神社）、スギ、ヒノキ、

（常緑樹）アラカシ、イヌツゲ、シラカシ、シロダモ、

スダジイ、ヒサカキ、ヤツデ、ヤブコウジ、ヤブツバキ（花）

（常緑つる植物）…スイカズラ、ツルグミ*、テイカカズラ

（落葉樹）アカシデ、アカメガシワ、アブラツツジ、

ウグイスカグラ（花!）、エゴノキ、ガマズミ、クリ、

コゴメウツギ、コナラ、ニシキギ、ネジキ*、ハンノキ（湿地に）、ホオノキ、マンサク（花）、

ムラサキシキブ、ヤマコウバシ、ヤマツツジ、ユリノキ、リョウブ

（草の花）…オオイヌノフグリ、タンポポ、ナズナ、ホトケノザ

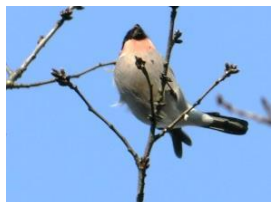


春一番に咲く“マンサク”

✿ 見た・聞こえた鳥

ウソ、エナガ、カケス、カルガモ、ジョウビタキ、スズメ、

ツグミ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、ヤマガラ



ウソ

✿ 早春の里山ハイキングの風景



唐沢山城跡の“くい違い虎口”



高さ8mにもなる“高石垣”
長さも40mにわたって続く

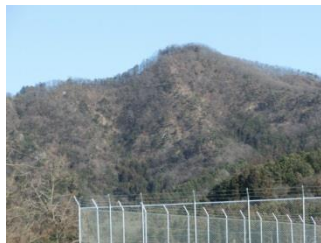


高石垣の下に
立ってみました



強い風にも負けず進め進め！

ヤブツバキ
冬枯れの山の彩り



諏訪岳



唐沢山（右）から諏訪岳（左）の山並み

✿ 木の幹図鑑



ライシャワー夫妻寄贈のメタセコイア
右は枝先に残った前年の実
大慈寺にて



アカメガシワ
唐沢山中にて



ツガ

✿ ついでに大慈寺をもう少し…



大慈寺本堂
地味な田舎のお寺ですが



延暦寺、輪王寺などにも
みられる相輪櫓



元駐日大使ライシャワー夫妻
との因縁の解説

鹿沼・鳴蟲山ハイキング
～加蘇と西大芦にまたがる名山～
3月8日（日） 天気・小雨

山行案内 上久我法長内に車を置いて下大久保に回り、鳴蟲山を越えて法長内に下ります。このコースは登りも下りも踏み跡程度の道しかなく、ルートファインディング（道探し）技術の要求される山です。それにしてもさほど時間はかからないと思われますので、下山後トイレ休憩をはさんで、近い所にありながら訪れる機会が少ないと思われる久我神社、加園の興源寺（曹洞宗）、上大久保の神舟神社、下大久保の大葦神社等を訪ねてみましょう。

下久我・馬場集落に佐野氏の一族、久我盛綱の築城といわれる久我城跡があります。平時は里に館を構え、いざ戦いのときは後方の山に構えた山城にこもるというのは、山岳地帯にあってはよく見られることです。この城も平時のときの久我城と、ひときわ高い城山（じょうやま）と地元の人々が呼ぶ山に築かれた金ヶ沢城の二つからなっています。この集落にある久我神社には日光杉並木を思わせる長い参道があり、しかし日光杉並木でも見られない樹齢 500 年以上の老杉も数多く見られます。本殿は文化 13（1816）年の再建。一間社流れ造りで屋根は柿葺（こけらぶき）です。本殿壁面彫刻は麻苧町屋台の金龍四個を彫った磯辺一族の代表的彫物師の一人左り杢齋（ひだりもくさい）の作と思われます。

山に里に、春の兆しを探してみましょう。

栃木百名山の一つ、鹿沼の鳴蟲山（標高 724m）に登りました。

荒井川に沿って上流、加蘇山神社方面に車を走らせると、二股山登山口の辺りから久我の盆地が広がります。ここから眺める鳴蟲山は鋭い峰を二つ持つ双耳峰で、二股山を凌ぐ雄姿です。この日は今にも雨が降り出しそうな天気でしたが、霧を纏った山もまた趣のあるもの。

法長内に同行の車を 1 台置き、大芦側の久大保あたりから登ってこちらへ下ってくる計画ですが、数日前に下見してきたという隊長によると、少なくとも加蘇側の山道は踏跡程度の道しかないらしく、この場所に戻って来られるかどうかかわからない、と言います。

もう 1 台の車で、下久我から山を越えて大芦側へ。片野道の橋を渡って右折し、大芦川沿いの林道を上流に向かって少し進んだ所で空地を見つけ、車を置くことにしました。身支度を整えて出発。林道をしばらく歩いて行くと、対岸に大葦神社が見えます。Y 字

路を左折すると道は蛇行しながら山を登り始め、正面の木材切り出し作業場を巻くように、林道はさらに右に進みます。林道終点の1カーブ手前の道端に送電線巡視路を示す黄色いポールがあり、この目印が山頂直下の紅白鉄塔まで続いて、あまり迷わずに山頂に到達することができました。ほとんどがスギやヒノキの植林地の中、灰色鉄塔の先のゆるやかな尾根上のピークに3本のモミの大木（最大のものは胸高周囲260cm）を発見、暫し感慨に浸ります。ここから見る本峰は結構大きい。しかしまた鞍部に下り、また登って大きな岩場の上へ、さらに尾根上を進むと、やっと山頂手前の紅白の巨大な鉄塔が現われました。

山頂は小祠が祀られ、社叢の如くヒノキが鬱蒼とした好所でした。

下りは尾根の分岐がいくつもあって迷いましたが、金銀のテープの道標に従って下り、最後の灰色鉄塔も確認して下山、わが隊の車に無事再会したのでした。

帰路、久我神社と久我城跡を見学しました。

✿ 参加者

佐々木伸二、平井亜湖・裕子、小島美穂、
石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計8名）



鳴蟲山山頂にて
小さな石祠が幾つも

✿ 見た植物（50音順、*は特に多く見られたもの）

（今回の大木！）アカマツ（胸高周囲274cm）、モミ（同260cm）、
（その他針葉樹）アスナロ（写真ㄴ）、イヌガヤ、スギ、ヒノキ、
（常緑つる植物）スイカズラ、テイカカズラ、ピナンカズラ、
（半常緑樹）ヤマツツジ、
（落葉樹）アオハダ、アカシデ、イヌブナ、エゴノキ、オノオレカンバ、カラスザンショウ、
クロモジ、コアジサイ、コナラ、トウゴクミツバツツジ、ネジキ、ホオノキ、ミズキ、
ミズメ、ヤマハンノキ、リョウブ、
（草の花）イワウチワ、カシワバハグマ、ツルリンドウ

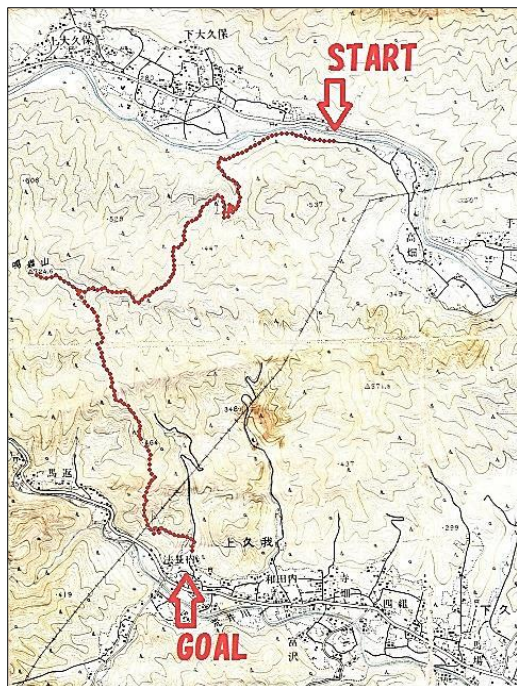


アスナロの葉
ヒノキよりかなり大ぶり

✿ 見た・聞こえた鳥

ウソ、ハシボソガラス、ミソサザイ（さえずり）、ヤマガラ

✽ 鳴蟲山で見たもののあれこれ



送電線の鉄塔が目立つ鳴蟲山



登り始めはこんな道



植林地の中を登って行く



⤵ 送電線の鉄塔管理のため
← 歩道が整備されている

鉄塔が山の中にそびえる
その真下から見上げると…→





モミ

↓モミの大木の太さ



オノオレカンバ



カラスザンショウ



アカマツ

↓下から見上げたアカマツ



↑何のしわざか樹皮が剥けて
キクイムシの“作品”が
現われる↑



大岩

道標はここから林道に下りる
ように指示しているが、
尾根をたどって行けば
灰色鉄塔を経て下山できる

肉食獣のフン→
タヌキ、キツネ、テン、シカ、
イノシシと“痕跡”をよく見かけ
獣の種類の多さを知る
(形状の他、残留物によっても
「主」を推定できる)

集落の近くには
イノシシ捕獲の仕掛けも→



←久我神社
杉並木がみごと
だった

久我城跡→
城郭の地形を
残したまま
耕作地となっている



探訪・鹿沼の鎮守と古木③

千手院（真言宗）と千手山城跡のモミ

～鹿沼中世史をめぐる～

鹿沼城の歴史は 680 年前の鎌倉中期にさかのぼる。当時鹿沼には御家人宇都宮氏の勢力が広がっていた。1292（正応 5）年、日光二荒山神社に化け灯籠、唐銅の灯籠を奉獻した豪族鹿沼権三郎入道教阿もその 1 人とみられる。彼は坂田山の山頂に館を構え、居住地としたという。当時の鹿沼の市街地周辺は押原郷とよばれ、源頼朝が日光山に寄進したと伝えられており、鎌倉と日光山との因縁が深かった。現在鹿沼北小学校の北側の校地にある御所森は、日光山の里坊である押原御所があった所で、押原 66 郷（現在の黒川右岸の鹿沼市街地の大半）の総鎮守であった。

鹿沼権三郎より 200 年後、1523（大永 3）年、この地方きっての豪族だった鹿沼左衛門太夫教清が宇都宮氏とにらみ合いとなり、遂に上野台地で宇都宮忠綱の軍と合戦、鹿沼勢は敵の豪将、山野井将監を討ち取ったが教清が戦死、嗣子のない鹿沼氏は滅亡する結果となった。

鹿沼氏を落とした宇都宮忠綱は、日光神領の大半を手中にし、加園城主渡辺右衛門尉や南摩城主南摩舎人之輔を配下に粕尾、栗野、久野、深程、真名子、大柿を奪って皆川をも攻めようと、河原田で皆川、小山、壬生の連合軍と対した。しかし連合軍の奇襲に敗れ、忠綱はやっとの思いで宇都宮に逃げ帰った。現在栃木市の「合戦場」は当時の名残をとどめる地名である。

鹿沼に入った連合軍の壬生綱重は古くからの坂田山館を改築し居城とした。自然の高台をそのまま利用、曲輪で守りを固めた一城別郭形式の山城であった。

その後、1532（天文元）年に綱重の嫡子、綱房が御殿山を中心に大改築、本丸を中心に同心円状の空濠をめぐるしもので、高台を利用したの坂田山から、広い場所を求めての城に移転したのである。

先に述べた押原の総鎮守はそもそも 782（延暦元）年に御所森（鹿沼北小学校校地）に創始され、大同年間（806～810 年）に日光三所権現が勧請されたと伝える。綱房が御殿山に鹿沼城を築くと、1534（天文 3）年、御所森にあった鎮守を鬼門の守りとして城内（現在の今宮神社）に移し、今宮大権現と称したという。

以降、壬生一族の複雑な争いが続いた。後に鹿沼城に入った壬生義雄は銅製鰐口を寄進した日光山座禅院昌歆とともに同社の造営、修復を行ったが、1590（天正 18）年、秀吉が小田原城を攻めた時、北条氏に味方して小田原城に出兵し、酒匂川にて戦死した。義雄には嗣子がなく廃城となったが、実は小田原出兵の留守に宇都宮に攻め



千手山にある解説板



お馴染みの仁王門



千手観音を納める本堂
“二十四孝”の彫刻も見もの

られて落城、鹿沼城は遂に姿を消した、との説が有力である。壬生義雄の墓は西鹿沼の雄山寺にある。

千手院は宝蔵寺の奥の院として建立されたものである。仁王門の前で参道を見下ろすと、その直線上に宝蔵寺本堂が見える。初め千手堂とよばれ、その僧能賢は、1525（大永5）年京都東寺の宝菩提院から下向した亮恵から法流を伝授され、千手院の院号を授与された。その千手観音堂にまつられる本尊木像千手観音坐像は鎌倉時代末期の作で、日光の中禅寺立木観音、清滝観音とともに、1本の木から彫り出されたという伝承をもつ。初めは板荷観音原の千手堂に安置されたが、1535（天文4）年、鹿沼城主壬生上総介義雄がこの地に移し、城の守護としたという。昭和38年、宝蔵寺が千手院を敷地とともに市に寄付した。

観音堂の竜の彫刻には享保11（1726）年の墨書銘があり、市貝町の石原弥兵衛の作である。千手観音坐像を安置する厨子を、二十八部衆像と風神・雷神像が守護する。

坂田山城と千手山がどのような関係にあるかは別として、千手山の山頂を本丸と考えた場合、千手山は一つの独立した山城と認めることはできないだろうか。参道の石段から車道を挟んで左側にある3段の駐車場、遊具のある広場、階段を登って行くと度々あらわれる小さな平地。これらは公園化に伴って造成されたものではなく、もともとあった段状の郭を利用して様々な施設を建てたものであろうという。昔のことで大規模な造成工事もできなかったのだろうが、あるいは城跡を活用したので造成工事の必要がなかったのかもしれない。結果的に形だけでも遺構が残されたことは良かったと思う。

東側は崖と言っても良いほどの急斜面で敵の侵入を防いでいる。本丸と思われる山頂の北側に、千手山最大の谷が東西に切れ込んでおり、千手山北口に至っている。深い谷なのでこれだけでも敵の進入を防ぐには充分であるが、さらにその谷に平行して横堀が東西に掘られている。そして山頂本丸から南に向かって深い縦堀が入れてあり、いつもきれいに草刈りされていることもあって、美しい景観となっている。これ

（次ページへ続く）

によって東西南北とも敵が侵入しにくい山城の構造となっている。

そしてこの豎堀を一層美しい景観としているのが豎堀の斜面や小尾根上に立つモミの木である。仁王門の隣には子育て地蔵を祀ったお堂があり、その他観音堂の周囲には数々の石碑や石塔がある。観音堂から西に向かうと豎堀に突き当たり、堀が二股に分かれた小尾根上に最も太いモミが立っている。胸高周囲 327cm。舗装道路をさらに登って行くと階段の上に鳥居があり、「雷電神社」とある。地元農民の鎮守で落雷なきを祈願するという。その背後、豎堀の斜面に 2 本のモミが立ち、対岸にもう 1 本。さらに山頂に近い所にもモミの木がある。

参考図書：「栃木の城」昭和 50 年 4 月 20 日 下野新聞社発行

「下野三十三札所巡りと小さな旅」平成 4 年 6 月 13 日 下野新聞社

「栃木県の歴史散歩」2007 年 3 月 30 日 山川出版社

塙 静夫著「とちぎの社寺散歩」2003 年 7 月 7 日 下野新聞社

鹿沼市史叢書 7「鹿沼の城と館」



モミの木と豎堀（たてぼり）
この地形は自然のものではなく
戦のために人が掘ったもの



モミの大木を見上げる
右はその葉



本堂周辺の石碑群
“石碑塚”

←石碑塚には
鹿沼でよく見られる“十九夜塔”も

Unique な鹿沼の植物

オニシバリ（一名ナツボウズ）

山地に生ずる有毒無毛の落葉灌木にして、雌雄異株を成し、高さ1m内外に達す。茎は直立分枝し、灰茶色を呈す。葉は質軟にして互生し、倒披針形全辺にして短柄を具え、通常枝頭に相集り、秋生じ夏に及べば落葉す。故にナツボウズの一名あり。早春葉腋に相集て黄緑花を開く。萼は筒状四裂、八雄蕊、一雌蕊あり。雌花は雄花より小にして果実を生ず。果実は楕円形の漿果にして七月頃赤熟し、味辛し。樹皮を抄紙の料と成し得べし。和名鬼縛りはその樹皮強靱なるより名く。
(「牧野日本植物図鑑」より)

オニシバリの枝はやわらかく、曲げて折れない。反面強靱で引っばっても容易に切れない。

鬼をも縛れる、というのがその語源である。またこの植物は夏に葉が落ちて、9月頃新しい葉を拵げて冬を越す。一名ナツボウズの語源は夏に葉がないことに基づく。9月に展開した葉の下の方にはたくさんの蕾が付き、立春を過ぎた頃、緑色の花を開く。

石灰岩の山に見られるようで、鹿沼では永野の三峰山で多く見られる。またその北西、出流山の千部カ岳でも見られる。



オニシバリ

2月28日、戸張町にて

本の解説・書評・読後感・研究をまとめた本

僕は本は大好きだし、読書も好きなのだけれど、反面苦手なのである。明治時代の本など、漢字やことばの意味をきちんと調べながら読むと、1 頁読むのに 1 日かかる。それでもそんな古い本ばかり読んでいて、たまに現代の本を読んだりすると、読書ってこんなに楽しいの？とすらすら読めることを喜ぶのである。とはいえ、現代の本でも、僕は一度ですらすら読めることは少ない。たいていは 2〜3 度繰り返しながら読まないと理解できない。まあどちらかという本はながめているのが、好きでもある。

前にも言ったように読書感想文はなおさら苦手だ。というより書けない。とはいえ、それは、きちんと理解していないからかもしれない。あるいは記憶力の問題か。今読んだことをすべて頭の中にうかべ、それを自分の人生に結びつけて考え、想像を拡げていったら書けるのかもしれない。

そのくせ、僕は山の本について、人の書いた読後感や書評、新刊案内、解説等の文章やそれらをまとめた本が大好きでもある。本の研究はまた、その本を書いた人の研究でもあるし、人と人とのつながり、その時代の歴史の研究にもつながるからだろうか。

高校時代に手に入れて、今でも最も大切にしている本、というより冊子が 1 冊ある。雑誌「山と溪谷」1976 年 1 月号の付録「登山者が読んでおきたい山の名著 BEST100」がそれだ。日本山書の会の編で、執筆者は本会の阿部恒夫、岩瀬皓祐、上田茂春、小野敏之、黒岩健、水野勉の各氏。

大学生活が始まって、奥多摩に山登りに行こうと思って、ガイドブック代わりに山岳雑誌のバックナンバーを集めはじめた。父が『「山と溪谷」は昔はずっと小さかったんだ』と言っていたのでいつか見てみたい、という思いもあった。山の本が高いというのも知っていたので、100 円位で買うことのできる雑誌を集めることは現実的であったかもしれない。そのうち「山の本 BEST100」を思い出し、1 年に 1〜2 冊集めれば一生のうちに全部そろえよう、と思い立ち、山の本の収集も少しずつ始めた。

そこで、その集めた本のことを解説してくれる、という意味でも「山の本 BEST100」は重要なのである。ここに、本誌第 28 号で紹介した、平凡社ライブラリー「山シリーズ」の解説を書かれた日本山書の会代表の水野勉からいただいた「水野勉・主要著作目

録」がある。それによると「山の本 BEST100」のうち、水野さんは「山の人生」「たった一人の山」「アルペン行」「スイス日記」「静かなる山の旅」「ハイランド」「わが山山」の7冊を執筆されているようである。

このような、山の本について解説し、思いを綴り、評し、研究をまとめたものは単行本でも数多く出版されているが、前述した日本山書の会の水野勉さん、上田茂春さんは数々の山岳書研究の本を上梓されており、いずれも評価が高い。お二人の本はその装幀に趣向を凝らしていることでも知られている。発行部数の少ない限定本は入手が難しいが、上田さんの代表作「山の本——蒐集の楽しみ——」や水野さんの代表作「登山家素描」「ヒマラヤ文献逍遙」等は山岳書専門の古書店（本郷の森井書店等）の古書目録には度々登場するので、入手は比較的容易である。これらの、著作を読めばおのずとその本自体、一つの文学作品であることを知り得るであろうし、その理解しやすい文章もありがたい。

さて、山の本についての解説、書評、思い、研究をまとめた本は他にどのようなものが挙げられるだろうか。

また、前号で挙げた「山の本 BEST100」の本の中に、自然や生物に関する本が数多くある。山が自然であるのだから、山の本の中に自然や生物の本があるのは当然だが、実際にどれくらい重なっているだろうか。

さらに、自然・生物関係の本の書評、解説、案内、研究を書いた文章や本は存在するのだろうか。山の本についてもそうなのだが、自然や生物に関する本を読みたい、と思う時、何を手掛かりに、本を探したらよいのか、その手掛かりになる本が欲しいのである。



「登山者が読んでおきたい
山の名著 BEST100」

恒例、田部重治研究会・白坂正治氏からのおたよりです。

前略

「月報第31号」拝読させて頂きました。歴史を踏みしめての山行というのはまた
 趣がありますね。関連のない山行(少なくとも記録としては残されていない)は山行
 で楽しいものですが、田部先生の筆に導かれてのそれは物理的な景色の変化は
 如何ともし難くとも心象(気色)は窺えて、田部文学の地平が広がる感じがします。

“BEST100”に著作の1冊目と自伝の色彩を帯びたのが入っているのは心憎い
 (？)ですね。肉体性に精神性を並立させる為、机上登山にも大いに励みたいと
 私は思っています。乱筆乱文にて。

草々

2月23日

本の解説・書評・研究・本への思いを書いた文章は、その取り上げ
 られた本に輝きを与えるものです。毎月お寄せいただいている白坂さ
 んのお手紙も、本誌の唯一のともしびとなっています。年度末に際し、
 改めて、お礼申し上げます。

手紙というのは誰でも面倒なものです。便箋を用意して、ペンを
 用意して、封筒、糊、切手…、考えているうちに、書かないで終わり。
 そんなことが多いものです。その点、白坂さんはハガキ1枚取って
 5分(?)ですらすら書いて送られる。日頃何十人(何百人?)の生
 徒の答案用紙、通知表をさばいておられる教師ならではの成せる技で
 しょうか。

田舎発信のつたない本誌ではありますが、来年度もよろしくお付き
 合いただきますよう、お願い申し上げます。(阿部良司)



櫻井節子さん画

白坂さんよりご指摘いただきましたが、文中に触れられている、前号掲載の
 「登山者がぜひ読んでおきたい一山の名著 BEST100」でご紹介した田部重治
 『日本アルプスと秩父巡礼』(大正8)の発行元は「北星社」ではなく「北星堂」
 でした。訂正方お願い申し上げます。

自然観察クラブ 2015 年度 行事予定



- | | |
|--------|---|
| 4月5日 | 神奈川東京都県境・陣馬山～景信山ハイキング
～甲州街道、小仏関所跡を訪ねて～ |
| 19日 | 日光・鳴虫山～含満が淵ハイキング
～観音寺（天台宗）・化地蔵・浄光寺（天台宗）参詣～ |
| 5月3・4日 | 秩父・三峰山～雲取山縦走～三峰神社参詣、田部重治レリーフ探訪～ |
| 10日 | 日光・滝尾古道ハイキング（鹿沼学舎と共催）
～輪王寺・本宮神社・四本龍寺・滝尾神社・大猷院～ |
| 17日 | 茂木・焼森山から鶏足山、里山の植物観察会
～小宅古墳群・千本城跡見学～ |
| 6月7日 | 日光・雲竜溪谷探索～稻荷川林道最奥、友知らず、雲竜瀑～ |
| 21日 | 日光・切込湖刈込湖ハイキング
～温泉神社、温泉寺（天台宗輪王寺）参詣～ |
| 7月 | 日光・太郎山ハイキング～日光二荒山神社中宮祠参詣～
北光サマースクール・雑木林の昆虫観察 |
| 8月 | 北光サマースクール・黒川の魚類観察
日光栗山・奥鬼怒ハイキング～野門東照宮参詣～ |
| 9月 | 那須・朝日岳～三本槍ハイキング～那須温泉神社参詣～ |
| 10月 | 日光・茶ノ木平～半月山ハイキング
～中禅寺（立木観音・天台宗輪王寺）参詣～ |
| 11月 | 益子・茂木、芳賀富士ハイキングとSL乗車
～安善寺（浄土宗）・熊野神社・安楽寺（浄土宗）参詣～ |
| 12月 | 県南、神社仏閣・古墳・城跡・巨樹探訪の会
～勝願寺（ケヤキ）、成就院（シダレアカシデ）、磯山神社（スギ）、
判官塚古墳、判官台一里塚（エノキ）、羽生田城跡、壬生城跡、壬生寺
（イチョウ）、常楽寺、雄琴神社、中村八幡宮（スギ・ヒノキ・ケヤキ・
カシワ）、西明寺（クスノキ・スダジイ・コウヤマキ）～ |
| 1月 | 足利・大坊山ハイキング～山川長林寺、大山祇神社、山頂城跡探訪～ |
| 2月 | 馬頭・鷲子山ハイキング～鷲子山上神社参詣～ |
| 3月 | 藤岡・佐野、三轟山ハイキング
～三轟神社、慈覚大師円仁の生誕地を訪ねて～ |

☞ 本号の内容 ☜

山行案内・1	自然観察クラブ・春の特別企画 陣馬（場）山～景信山ハイキング・・・	2
山行案内・2	日光・鳴虫山ハイキング・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
表紙の本	黒川義太郎著『動物談叢』・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
活動報告・1	田沼・唐沢山より諏訪岳ハイキング・・・・・・・・・・	13
活動報告・2	鹿沼・鳴蟲山ハイキング・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16
探訪・鹿沼の鎮守と古木③	千手院（真言宗）と千手山城跡のモミ・・・・・・・・	20
Unique な鹿沼の植物	オニシバリ（一名ナツボウズ）・・・・・・・・・・	23
愛書家のひとりごと	本の解説・書評・読后感・研究をまとめた本・・・・・・・・	24
山書談話室	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	26
おしらせ	自然観察クラブ 2015 年度 行事予定・・・・・・・・	27



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第32号

2015年3月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

